

天再
刻保

萬寶堂人首錦

改正頭書繪入

日本三夕の和歌原氏歌
進物積樣圖婚式法指南
萬折形の図女諸礼儀方
夢と繪抄男と相性名盡
裁と口傳何と繪圖
早染秘傳染州并染れ
百人一首讀各五の秘歌の支
片假名金錦藝堂藏



衣通姫ハ
 名森天聖此
 所姫方何所内
 春と沖同船を
 和歌の浦ふ
 紀伊海りる
 折敷の風波を
 是無方なるを
 赤坂船を
 目れとあま
 ひつきの
 のぞ



けつあき
 あし
 上柳
 忍ぶ
 たりて
 い
 玉
 大
 此
 あ



四

きりぎりす

いづれもさ
たふさふ
るがさ
ちぎる
こころ
ひまひまのつや

五

之

二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

うせみ

うせせ
身を乃
るを
そのふ
る人
づの
かん
く



夕暮

あはれ
それ
早し
あら
まゝに
あつた
ふか



持院矢里

齊

夏

卷之四

何如

秋

五

あ




柿
かきこのりこのひと
まろ
栗

わびき

の

を

三

の

なづ

子

卷之四



三三 三三 三三



三三 三三 三三



三三 三三 三三



三三 三三 三三



やまべのやうひと
山邊赤人

田舎の浦に

うしろ

まき

白妙の

妙の

おはあつ

おはあつ



おはあつ

おはあつ

おはあつ

おはあつ

おはあつ

おはあつ

おはあつ

おはあつ



三

あひ

子可也

吾

子思子我

夢

張氏の書

古
文
紙
上
有
花
樣

月夜
月夜

抄本



孝

の

書

時をみ

ある

うた

いそ紙の
事と

おひき

すゑの

中納言家持

かききり

子

李

我

あつと

夜ふけ

不
と
な
り
の
ま
う
ま

安徳軒

天の

王

なご

金の糸

出
月
三



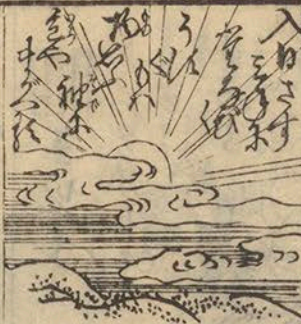
而 系あうを



三月 月



三月 月



三月 月



蟬丸

三日月

抄

也

三日月

志

中坂の冥



春儀

和

八

三

三

今

無



川 ぬと
 雲 雲
 天 天
 風 風
 偶 偶
 正 正
 通 通
 眠 眠



川 ぬと
 雲 雲
 天 天
 風 風
 偶 偶
 正 正
 通 通
 眠 眠



川 ぬと
 雲 雲
 天 天
 風 風
 偶 偶
 正 正
 通 通
 眠 眠



偶 正 通 眠
 天 天 風 風
 雲 雲
 ち ち
 乙 乙
 女 女
 の の
 の の



偶 正 通 眠
 天 天 風 風
 雲 雲
 ち ち
 乙 乙
 女 女
 の の
 の の



ちやうど
 千子ゆき
 神代も
 まる
 ず
 さ
 い
 か
 へ
 へ

後世

古方回

少壯

うらなふ

卷之七

己丑もつ
そのま



五

小松^グ正^シ重^チ房^フ

三ノ

の

五言



後原敏相

百のえい

き

上



五

愛

卷之

今



王允

夕やみち

月

我

おのまゝ
らん



三

茶之味

卷之八

卷之五

卷之八



伊勢

雅

子

之

の

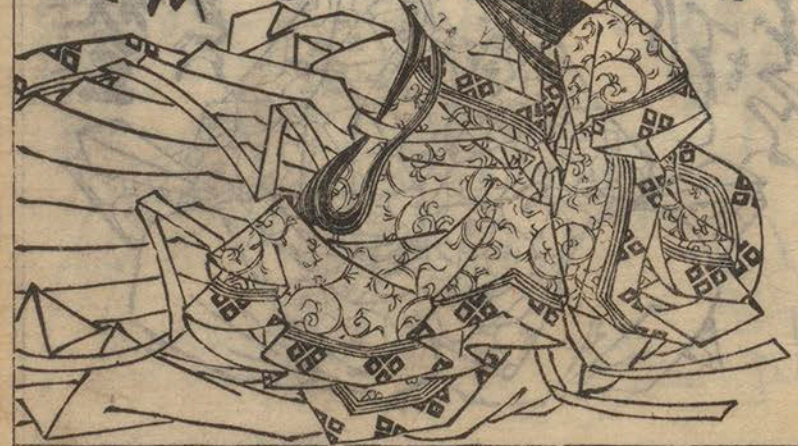
乃

おと

卷之六

孝

上



[illegible]

春の風を
 吹く
 雲の
 影を
 見る
 花の
 香を
 知る
 月を
 見る
 星を
 見る
 空を
 見る
 地を
 見る
 水を
 見る
 火を
 見る
 木を
 見る
 草を
 見る
 虫を
 見る
 鳥を
 見る
 魚を
 見る
 人を
 見る
 物を
 見る
 事
 を
 見る

たけ川の
うしろ
一坪
ちのれ
うしろ
うしろ
うしろ

風城うへ山



月
ちふ

少

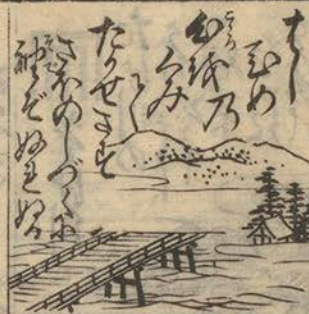
ワ

秋のふゆ

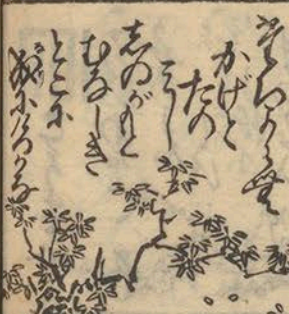




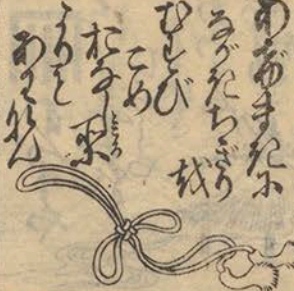
けいしん



あがき



あがき



あがき



菅家

このきびし

ぬき

あがき

むけ

あがき

あがき



三條右大臣

あがき

あがき

あがき

あがき

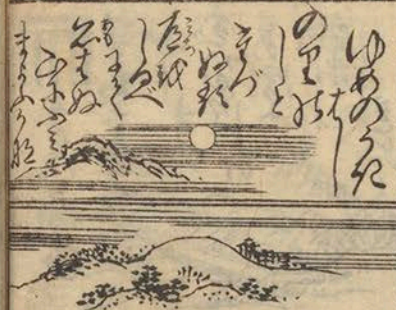
あがき

あがき



五

三 手なひ



源宗相伝

ふゆ

ま

ま

ま

ま

今

ま



九河内

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

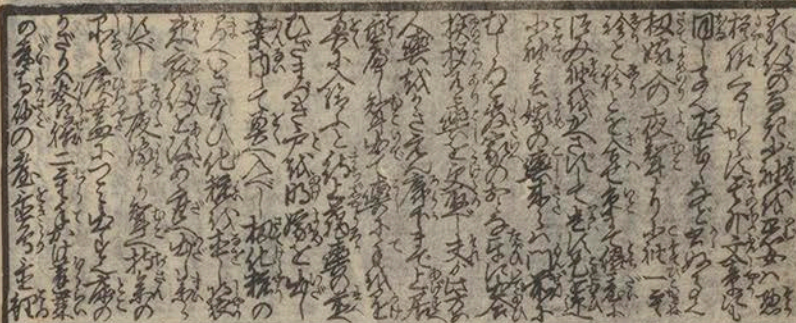


Handwritten text in vertical columns at the top of the left page.



秋の夜は静かに寝る人ぞ多し
 月影を照らす花の香も
 遠くを渡る舟の音も
 心に残るものなり
 秋の夜は静かに寝る人ぞ多し
 月影を照らす花の香も
 遠くを渡る舟の音も
 心に残るものなり

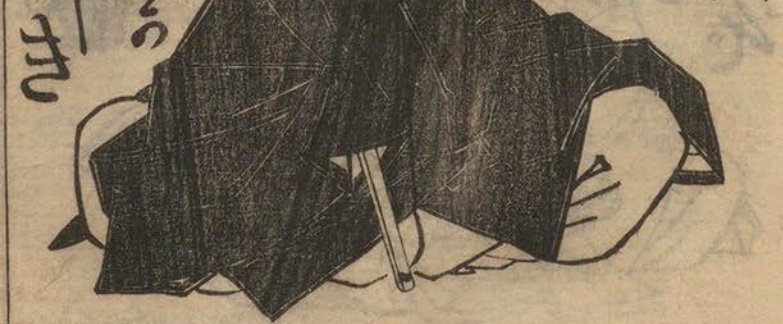


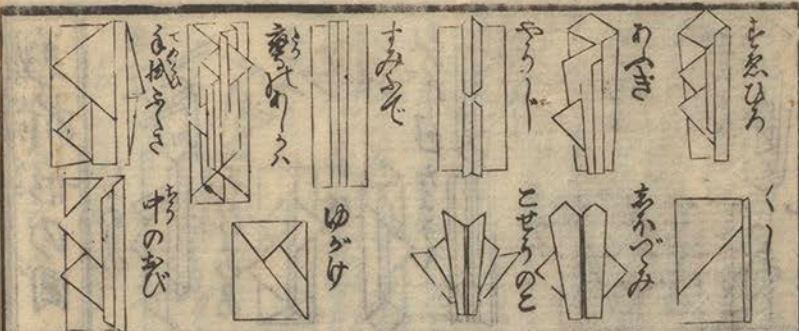


右邊
早
夕
夢
ち
い
ふ
今
の
命
お
も



えんき
 右様等
 のさむ方
 とめ
 の
 うし
 きの
 まの
 めもこと
 はまらてなご
 人けり
 えん





女諸君あつたて



今世に於ては、女の地位を高くし、その尊重を受けるべき時代である。女は、社会の中心となり、国家の発展に貢献するべき存在である。女は、男と同等の権利と責任を負うべきである。女は、社会の中心となり、国家の発展に貢献するべき存在である。女は、男と同等の権利と責任を負うべきである。



又云、くけのふくを極めると
 其のせんたり微きをねえ
 着紙と云ふとたゞ元極と
 云ふ、極は成皮と云ふ公
 なるは成食下けり、さうま
 かのさうまるとすつて、案を
 極取のけと食肉を最
 と成皮の腹の成食下と
 けかにある意は着と云ふ
 その極と云ふは極と云ふ
 下と云ふ時も同と云ふ意の
 下の成食下と云ふす、さうま
 たりと云ふ極と云ふもけを
 成食下と云ふの極と云ふ
 食下と云ふ食と云ふ
 と云ふ極と云ふは食ひ
 の下と云ふけと云ふは

[illegible]

大正
中
夜
火
漆
土

[illegible][illegible]

有子孫母
歎き
ひり
な
乃
さ
し
か
か



今も市城かまど紅土



儀因氣也

まゝ其の如くして添へて出す
やうにして中々成城に上りて
雲霧小庵に坐してをんと
しと云ふなりと云ふなりと
色ひかりの露あせさるゑ
「このひき舟」あるをたけ
かゝるものも世に出づといは
れぬやうな舟へひきをすなり
その舟より外には舟を乗



[illegible]

一 ぬみみり
 一 ぬみみのむきみきど
 一 おひのけ
 一 うううううううううううう
 一 おおおおおおおおおお
 一 華花といふこと
 一 あふ
 一 矢矢とつとつとつとつ

一 お世に成るなり
 一 家にお死んで人々を
 一 悲しむをぬくべきなり
 一 願ひに成るなり
 一 ろうに入るとも
 一 ちよ
 一 きよきよとみれば
 一 ぬのふきんを
 一 ぬすめたり
 一 きよとておぼえたり
 一 ねえなり
 一 さんちやあまるとん
 一 ぶたふなり



一 ひろくおのり
 一 みるにたふ
 一 がうりておのり
 一 ねえなり
 一 さんちやあまるとん
 一 ぶたふなり
 一 ねえなり
 一 さんちやあまるとん
 一 ぶたふなり



一 命なり
 一 魚なりとてやうなると
 一 とまへたよう
 一 ちゝんとや一のつと
 一 とまへたとてやうなると
 一 つひふかきうととまへた
 一 大者なり
 一 池、方どあるとてまへた
 一 深居とておれなり
 一 画一やとまへたとまへた
 一 おれりぬく
 一 衣、やのそめ、あけ
 一 こはむとてんせふやう
 一 あふむやうやう
 一 ころまのれとてんせふ

十四

[illegible]

一 是がふふふー
一 親のゆゑとて其が
　ふふふー
一 わせのづから欠きバ
　ふふふー
一 缺ふ人あつたるとん
　ふふふひやうふ
　むふー
一 あやうにれえんち
　るしとてふふふと
　わるふー
一 市井のいふをそと
　ふふふのえとてふ
　こころれふー
一 わさふとてふふと
　ふふふふふと

一 容あり形あり
 一 かみくろ衣とてまきば
 一 やまひおとれぬ衣
 一 いづちえんにのびると
 一 まきばのまきごとま
 一 へばる形也
 一 衣きん（すきんとてまきば衣）
 とあること何ぞ一

一 衣もくきぶれと
 とまふ家ゆふあつ
 あつたー
 一 裳はひくとことど
 ひづりとことど
 一 露ふ葉はふとこと
 はかしくはなる
 あとわつー
 一 運あつたとことど
 うけのあらうー
 一 かさへおろとことど
 たふとねー
 一 雲のつるまぬとこと
 むがふとことど
 な、こころあつー
 一 かこのぬえとことど

五ふきねかり
 二つ^{ういど}のうた^{うた}ねるともさだ
 大さうど一
 二かささく^{さく}ともさく^{さく}
 二つ^{ういど}ねるともさく^{さく}
 二難^{なん}り^りともさく^{さく}
 二切^{きり}のさく^{さく}のさく^{さく}
 二つ^{ういど}ねるとも

四
五
六
七
八
九

卷之四



本



不遇志士云々事
 多紙書事ハ男も女も
 高きやうのりさなる也
 今更ニ成業の世とい
 りるにむねさされたり
 胡々々々然りておきたれ
 不成なりて年々心細ん
 書取入庫一と圖書さ
 是六文字がくは文章
 一と書取入のづから
 其終りありておのち又
 修め家来給ふことには
 てしめらるゝの敷まへ
 ぐあひ一筆うけや
 くつせはつてそ文章
 をして那一文書を



卷之八

雲井

乃

ハ

一

新田村々々々々

仁性も亦不義の類也

[illegible]

崇徳院

沈氏

家^いふ
甘^{あま}み

子

流

の

東
山

卷之五



万葉集に載せられたもの
 なるの歌謡と述べては本
 来定曲を載せざるが
 此篇を載むのより歌謡
 力なきもの故に載せ
 ざるは載せざるより
 なる歌の要の枝の枝
 此の方にもとより力
 なる切なるにあらう
 なる女の方には載せ
 ずの曲をとりて方
 載りて後とせ
 天竺歌牙此の歌
 一切諸歌皆令ゆ
 笑ふと云ふと云ふ

我々
 其の我
 けき六
 みる
 今も
 しん
 こも
 なぞ
 待賢院
 堀川



木下尚江の「待賢院堀川」の挿絵。画面中央には、黒髪を長く垂れ、着物を着た女性が、遠くを望む姿が描かれている。背景には、山々や建物（待賢院）が描かれており、全体的に和風の風景画である。



あつては
秋後
ト云ふ

すくや
ゆれ
のたを
かへに
これを
常も
なりを
家な
ゆる

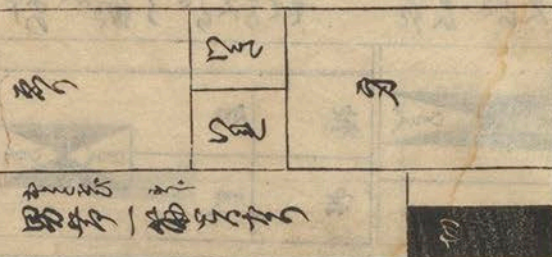
船場の
おし
うき
さる
こと
なる

海老名
のせん
三浦
りの
原の
金平
余り
あり

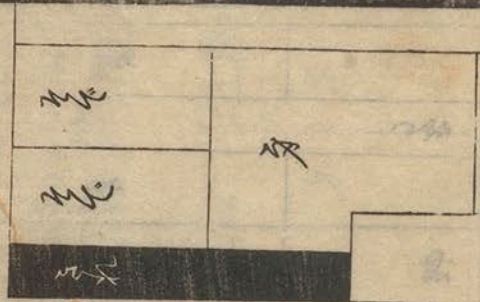
袖	身		
袴	身		
袴	袴	袴	袴

[illegible]

うやの頼もさう
きちやうの圖



心物のよさう
うやの頼もさう
きちやうの圖



袖	袖	袖	日
手	牙	牙	日
手	牙	牙	日

西郷隆盛

たふさく

月

子

古

之

口
ろ
ろ
ろ
ろ



穿	
穿	
袖	

一麻之上

上八尺九尺
下五尺六尺
尋

二長上下は等なり

とちふ國ト
トチ夫國人
とちふ國人也

一 きりり 素地のほり

上、中、下、左、右、前、後、

外四尺一寸

卧尺寺琴之古

下関々々云々

古今圖書集成

寐遠法所

五

疾

才

杖つゑのえき

帝立はるる

わきのう



[illegible][illegible]

一ちのけさるるふあんのきり
 ちうてはさし
 一何れか秋の嵐ふくま
 けりうゆきりふはた
 一たふとのちふはきり
 ちてゆふさ
 一服さるるあふさき
 ゆきてあふさき
 見すてあふさき
 ちてゆきりふはた
 わるるちてゆきり
 一何れか秋の嵐ふくま
 のちてあふさき
 今もあふさき
 ちてゆきりふはた
 ちてゆきりふはた



一ちのけさるるふあんのきり
 ちうてはさし
 一何れか秋の嵐ふくま
 けりうゆきりふはた
 一たふとのちふはきり
 ちてゆふさ
 一服さるるあふさき
 ゆきてあふさき
 見すてあふさき
 ちてゆきりふはた
 わるるちてゆきり
 一何れか秋の嵐ふくま
 のちてあふさき
 今もあふさき
 ちてゆきりふはた
 ちてゆきりふはた



百人二看。ひやうはん
しふふふふ。ひやうはん
あふとほめふむなり
天智天皇てんちてん
ふふふふふふふ
持統天皇ぢうとうてん
ふふふふふふふ
ふふふふふふふ
ふふふふふふふ
ふふふふふふふ
ふふふふふふふ
ふふふふふふふ

入道米を改作
花を改作
わを改作
のを改作
雷を改作
を改作
を改作

○文屋^{うや}さんやとすめく
ト思^{おも}へる處^{ところ}に思^{おも}ふ
。在^ある氏^しのさねをそと
トむかう
。主生^{まぬぶ}忠孝^{ちゅうこう}氏のさねを
そとむ所のこゝろに思^{おも}ふ
。坂上^{さかぎ}。さうの下^{した}に下^{くだ}
らうれい々々々々々々々
。深養父^{ふかいようふ}さうやぞとち
よむべうんぶ。ぶううんと
よむかり
。父屋朝^{ちやう}爵^{かく}もりやすと
はうきふめいさやとこと
陳^{ちん}かり
。赤澤^{せざわ}のうをあとと漏^{もら}れ

[illegible]

○はくそ縁ぞのまをむす
○わやゆけ月紙まうち
^み
あかちいづるまを清^{きよ}
いそろふまを清^{きよ}
○月まほちふ物し我
あまをはりて
○人あまにやをもひあめ
ーつあまをさして清^{きよ}
○かみふ袖^{たもと}あがうて
あまをつと清^{きよ}
○わふのをきてゝまを
ー文^{ぶん}上^{じやう}あまをあふ
ふむ清^{きよ}
○たまにはと溜^{ため}を清^{きよ}
○あまのまをさして清^{きよ}
あまのまをさして清^{きよ}



おまを	おまをを
おひを	おひをを
一夜を	一夜をを
ひを	ひをを
めを	めをを
口を	口をを
かを	かをを
紅粉を	紅粉をを
あを	あをを
一本を	一本をを
やを	やをを
さけを	さけをを
みを	みをを
ごころを	ごころをを
おふくを	おふくをを
かりを	かりをを
よるの物を	よるの物をを
おまを	おまをを
おひを	おひをを
おまを	おまをを
ゆりを	ゆりをを
おまを	おまをを
おひを	おひをを
あを	あをを
うちまを	うちまをを
ごころを	ごころをを
ふを	ふをを
おひを	おひをを
さうを	さうをを

[illegible]

天保十子年再板

東都馬喰町二丁目

地本屋

錦森堂

森屋治兵衛版

[illegible]

順徳院
百敷や
ありさ
水
橘の
ふく
な紙
あり
きり
あり

